



1/1の護摩でのお札の開眼・お加持の様子。お札に護摩の火が入っています。

河神から転じた弁才天は、芸術や学問をつかさどり、仏教では天部にとりいれられた。日本では中世の琵琶を弾く姿で表された。

とくに日本人は弁才天を・金気・として崇拝してきた。江戸時代には蓄財の神弁財天とも記され、庶民の信仰を集めるようになった。水辺に祀られ好物の卵を供えたりする風習も生じてきた。すなわ

あけましておめでとびじょういす。


なみきり
 茨城県笠間市福島五五二
 電話〇二九六一七二一三七四二
 URL <http://www.iwamanamikirine>
第三号
平成25年1月15日
発行 岩間波切不動寺

**平成25年は巳年
仏様について少し勉強しましょう**

巳という字は蛇の形から生まれたもの。頭コと尾しが完全にくっついていて。その形は不気味で妖しいが、古来より神聖化されてきた生きもので、仏教との関わりも大きい。蛇は七福神の一人・弁才天・と結びついている。金光明経・という、教典には弁才天の意味が説かれている。



ち・弁才天・から・弁財天・へ移行したのである。弁財天で配布している開運守札の・巳成金・は、実成る金・を意味している。巳成金のお札は財運を頂く為に財運の財布守りとして珍重されている。

さて今年の巳年、十二支の六番目、方位は南から東へ三十度南南東の方角。時間は午前十時頃を指します。この年、皆さんはどう過ごしますか。

波切不動寺では今年一年、弁財天様にあやかれる様に修行に精進させていただきます。今年もよろしくお願ひします。右のお札は二月三日に配布いたします。

お札について

波切不動寺のお札にはお不動さまのパワーが注入されています。写真を見てわかるように、一枚一枚のお札はお不動さまの護摩の火が入るようお加持したお札です。他の寺や神社とはちがう、とても力のあるお札なのです。

お加持とは

仏さまのパワーを注入して元気にする。これがお加持です。

お不動さま

お不動さまは大日如来の命を受けて忿怒相に化身したとされる像で、密教では行者に給仕して菩提心をおこさせ悪を降し、衆生を守るとされます。五大明王では中央に位置する主尊です。右手に剣を持ち、左手に索（縄）を持つ姿が有名で、頂髪が左肩に垂れ、目は一目（いちもく）にして明らかに見、背中の火は火生三昧（火の燃えるような境地）に入った状態を表現したものです。お不動さまを中心に矜迦羅（こんがら）・制迦（せい）いたか童子を脇侍（わきじ）に配した三尊形式が多いです。

お不動さまの特徴は以下の通り

- (1) 大日如来の化身… 化身とはお不動さまの姿に変わる事。
- (2) 火生三昧に住する… 火の中に立っている姿。
- (3) 童子形で肥満… 成人には理解できない不可思議さ。
- (4) 頂に七沙髻（しちしゃげい）がある… 最高の位の奴隷。
- (5) 左に弁髪（べんぱう）あり… 慈悲を垂れていることを表す。
- (6) 左目を閉じ… 悪い道を断ち、右目を開く… 仏の覚りへの道を開く。
- (7) 下歯、上の右唇を噛み… 智慧で天の魔を降伏する。下の左唇、外に翻じて生ずる… 慈悲で衆生を救う。
- (8) 右手に剣をとる… 智慧を表す。
- (9) 左手に索を持つ… 慈悲を表す。
- (10) 行人の残食を喫す… 業煩惱を尽くす。
- (11) 大磐石に坐す… 覚りを求める心が動かないことを表す。
- (12) 色醜くして青黒い。降魔を表す。
- (13) 遍身に迦楼羅炎（かるらえん）がある。
- (14) 変じて二童子となり、行人に給仕する。
一を矜迦羅、二を制多迦という。

等々の特徴があります。姿の一つ一つにお不動さまの我々を救おうとする心が現れているのです。真言密教は仏になる教えを説く宗教です。お不動さまのように生きることを目的とすることが、幸せへの近道です。

観音さま

世界中でもとても親しみのある仏さま。そうです、観音さまです。かのダライ・ラマ法王も観音の化身とされています。日本においても醍醐開山聖宝尊師や叡山中興元三大師等も観音の化身と信じられています。

観音さまには色々お姿があります。聖観音、千手観音、如意輪観音、准胝観音等、様々なお姿があります。

当山の観音さまは十一面観音さまです。

なぜ観音さまはこんなにいらっしやるのでしょうか。それは誰よりも他のことを考え、みんなを「あらゆる苦しみから救いたい！」と、とても強く思っているからです。そう思うが故にあらゆる形で私たちの前に現れてくださるのです。

では十一面観音さまはいったいどんな仏さまなのでしょう。簡単に言えば十一面さまは、いつも大久保先生がおっしゃるように道を開いてくださる仏さまです。

「十一面観音」という名前の通り、この観音さまは十一の顔をお持ちになっています。そしてそれを以て私たちのことを常に観ていてくださり、応援して下さい、守っていてくださいます。

正面の三面は穏やかな顔をし、慈しみの心を以てみんなに幸せを与え、左の三面は怒った顔をし、悲しみを以てみんなの苦を抜き、右の三面は穏やか表情でありながら牙を出し、善い行いをしている人を誉め称え、後ろの一面は笑みを浮かべながら怒り、悪い行いを改めさせ善い行いに向かわせます。そして頂上の一面は惣徳を表し阿弥陀さまの顔をされています。

この十一面を以て「頑張れ！頑張れ！」とおっしゃっています。私たちに悩みや迷いがある限り、その声を聞いて必ず力になってくださいます。

また秘密のお姿があります。瓶（ヒョウ）です。その中にはどんな重罪でも洗い流し、どんな病気でも治すといわれる甘露水が入っています。これを以て悪い業を洗い流し、私たちの心をきれいに洗い流してくれます。

そんなとっても慈悲深いかたが観音さまです。他者をいたわる心、思いやりの心、これが慈悲の心です。とても素晴らしい宝物です。観音さまに守られながら、ただ助けを求めるだけでなく、観音さまに見習い思いやりの心を育てましょう。



●●● 大久保聖翠師について・・・これまでのプロフィール ●●●

新しくお寺にお詣りの方は聖翠師のことを知ら無いのではないかと思います。聖翠師は五十三歳まで公立幼稚園の教員でした。幼稚園在職中は山岳登山に夢中になり、週末は槍ヶ岳、白馬岳、穂高岳と三千メートルの山々を登っていました。

僧侶になったわけ

聖翠師は平成八年八月二十三日から剣岳登山に出かけ、当日剣岳御前まで登ると黒い編笠をかぶった尼僧が近づいて来て、尼僧が身につけていた御守りを聖翠師にくれた。多くの登山者の中で、なんで私にと思ったと言う。

その後になる、人生を変える大事故をその時はまだ知り得なかった。事故は次の日、剣岳の下りで起こった。浮き石を踏んでの滑落、普通その地点での滑落なら即、死亡事故になるところだった。しかし聖翠師は死ななかった。何かに助けられた。全身打撲で済んだが、その姿は痛々しく何も身体に異常が無いのが不思議と、まわりの人達が口を揃えて言っていた。しかし帰宅してから身体の異変に気付いたという。

その異変とは、他者に見えないものが見える。近くに人がいないのに話し声が聴こえる、話しかけられる。それからというもの見える、聞こえる、話しかけられることが恐くて、気がおかしくなつたという。

ある日、お前様を助けたのはお不動さまだ。尼僧にもらった御守りを見てみる。言われるままにみて見ると、お不動さまの御守りだった。これからお不動さまの御使いとして人々を救え。と何処からともなく声が聞こえてきた。出来ない、と断わると、なら命を返してもらおう。と言われ命が無く

なつては大変と泣く泣く、お不動さまの御使いを承諾したのだそう。それからというもの、幼稚園が休みになると、醍醐寺に行つて修行をし。四国の石鎚山で修行をし、次は御嶽山だ、次は出羽三山だ、出流山満願寺のお滝だと次々と修行を命令され同時に易学を学ばされた。五年が過ぎた頃、幼稚園を辞めてこの道に進めと言われた。仕事を辞めたら生活が出来ない。と断わると、

「易を生活の糧にしる幼稚園の給料ぐらいはかせがせてやる。笠間稲荷の通りに鑑定所を用意した。」

との声が聞こえ行つてみると、すぐ此処だと思ふところが見つかった。しかし勤めを辞める気は無かつたそう。すると幼稚園では話ができなくなり、アアア、ウウウ、だけの会話になつてしまつたという。この状態では他の先生方に迷惑をかけると思ふ、平成十四年に退職を決意し仏様の御使いとして生きる覚悟を決めた。自宅の奥六畳間でお不動さま様を拝み始め、一人二人と信者が来て、大久保先生におがんでもらうと良くなるとの噂が広がり、数ヶ月後には二十人三十人となり、部屋に入りきれない人数となつた。お不動さまは部屋中に金粉を撒き散らし、信者はそれを集めて飲んで病気を平癒させた。相談事はすべて言われた通りとなり易も繁盛していった。

二年後には物置の二階に護摩堂を作り、そこで護摩をたくこととした。それでも信者は増え続け、階段から護摩を拝む始末。聖翠師が十七年七月七日から二階の階段から落下したのをきつ

かけに、裏山を開墾して本堂兼護摩堂の建立を発願、十九年五月四日落慶法要に至つた。いまもお不動さまのお力は衰えることなく、年々増大し続けている。また仏様が御集まり、十一面観世音菩薩様、お大師様、地藏菩薩様そしてお荒神様、弁財天様、大黒天様と御仏様も増え続けている。聖翠師は

「お不動さまに言われる通り実践実修しただけ・これからも生命の有る限りお不動さまのお使いをして皆様をお助けすること喜びとして生きていきます。」

このことだ。まだまだ先生のことを紹介したいのだが、紙面の都合上後誌に譲ることとする。このような先生なので、私共も色々見抜かれ怖い思いをしたり、尊敬したりする。特に先生にお不動さまが乗り移つて居る時は、とても怖く近寄り難いお方だ。



シリーズ

基礎からの
仏教

仏教という言葉はよく聞出し、我々日本人のほとんどが仏教徒といってもよいでしょう。大体の人は菩提寺があり、なにかしらお寺と関わっており、また仏教と関わりを持っていきます。しかし仏教がどういったものなのかまでは、よくわからないのではないのでしょうか。お釈迦さまがお説きになった教えということはどうなんでしょうか。「内容は？」と聞かれると、「うーん…」となってしまう。いったい仏教とはどういった教えなのでしょう。

仏教は今から約2500年前のインドでお釈迦さま（ゴータマ・シッダールタ）によって説かれました。ある小国の王子として生まれたお釈迦さまはある疑問を抱きます。「人は何故老いるのか、何故病気になるのか、何故死ぬのか、何故生きることは苦しみ(思い通り)にいかないことなのか。このような苦しみの原因は何か、それを断つ方法はあるのか。」と。こう強く感じたお釈迦さまは出家を決心します。王子というのに不自由な身でありながらも、「真実を求めたい」という気持ちで、また「すべての生きとし生けるものをこの苦しみから救いたい」という慈しみ悲しみの心をもって出家されました。



到達してしまいました。「これは私の求めているものではない」と思ったお釈迦さまは山に入り、それはそれは苦しい修行を6年間しました。それでも心は満たされず、ついに山を下りてしまいました。苦行した後のお釈迦さまは、目はくぼみ、ガリガリに痩せ細っていました。山から下りしばらくしてからお釈迦さまは木の下で休み、瞑想をしていました。ちょうどそのとき、スジャータという娘が現れ、お釈迦さまのその神々しい姿をみて押し乳粥を供養しました。お釈迦さまはその乳粥をたいらげ、元気になり力がみなぎったのです。すっかり元気になったお釈迦さまは川で沐浴すると、自分が座って瞑想するにふさわしい所を探し、そこに座り、とても深い瞑想に入りました。そしてついにお悟りを開かれ、自分の抱いた疑問を解決したのです。

ここでさらいます。釈迦さまの疑問はなんだったのでしょうか。そうです、「何故人は老い、病気をし、死んでいくのだろうか。何故生きるということは思い通りにいかないのだろうか。」ということ、それを解決する方法はあるのかということ、そこでお釈迦さまが発見され、お説きになったのが「十二因縁」と「四聖諦」です。十二因縁は何故人間が迷うのかというのを十二の過程で説明しています。四聖諦は迷いや苦しみの原因を断つための四つの道です。その

四聖諦

(ししょうたい)

四聖諦とは四つの道のことをいいます。それは苦諦、集諦、滅諦、道諦の四つです。具体的にいうとこうなります。

苦諦 (くたい)

苦しみ(思い通りにいかない)があるということを知る。

集諦 (じゅうたい)

苦には原因があるということを知る。

滅諦 (めつたい)

その原因より起こる苦しみを減らすことができるということを知る。

道諦 (どうたい)

その為の方法があるということを知る。

この四聖諦は仏教の全てといってもよい程重要なものです。家に例えると、基礎なのです。基礎が無ければ家は建ちません。四聖諦も同じです。この基礎を知っていると知っていないのでは大きな差があります。

物事には全て原因がありそれに因る縁によって結果が現れています。よく考えてみればわかります。善い結果には善い原因があり、悪い結果には悪い結果があります。善い結果はよいのですが、悪い結果はよくありません。善い結果はよいのですが、悪い結果はよくありません。どうしたら悪い結果でなく良い結果をうむことができるのでしょうか。それが出来るのがこの四聖諦です。「何故？」という疑問を抱き、なにが原因なのかを見つけ出し、「どうしたら？」と方法を見つけ、それを実践すれば必ず善い結果が生まれるのです。お釈迦さまは気づきそうに気づかない、幸せになる方法を私たちにお説き下さったのです。強い動機を持つてそれに必要な条件を見いだし、それに見合った努力をすることによって結果が得られるのです。

何か目標があるのであれば、ただがむしゃらに仏様にお願ひするだけでなく、この四聖諦のようによく科学して、自分で条件を見つけだして努力をすれば必ず結果として現れてくるでしょう。お釈迦さまがそうであつたように。

心を落ち着かせて冷静に物事を見つめれば、必ず道がみえてきます。仏さまは、この教えを説かれたお釈迦さまがそうであつたように、私たちの苦しみを除きたいと思つています。だからこの基礎を持つて努力すれば必ずお力添えをしてください。そうしたらそこに幸せという家が建つのです。ここでの努力は仏様のお陰を頂ける自分になるということです。仏様は常に私たちに「与えよう」と手を差し伸べていらつしゃいます。しかし私たちはその受け取り方を知りません。その方法がまさに四聖諦なのです。この実践こそが仏様のお力を受けとる器をつくるのです。